

(松岡譲没後50年記念)

〔半藤末利子氏インタビュー〕

父・松岡譲の作家生涯について

聞き手 劉 東 波

松岡譲(明治二十四〜昭和四十四)は、新潟県長岡市古志郡石坂村(現長岡市村松町)出身の小説家である。夏目漱石の娘婿や芥川龍之介の親友として、その名前は多くの人々に知られているが、作品があまり読まれていないため、作家として言及されることが少ない。今年の令和元年(二〇一九)は、松岡譲没後五十年という記念すべき年である。

筆者は本誌の前号(第21号)で、松岡譲研究の現状及び長岡市郷土史料館所蔵の松岡譲資料について紹介した。その後、長岡ペンクラブの機関誌の最新号『Penac』(第44号、令和元年六月)においては、「松岡譲没後50年特集」が企画された。松岡譲の四女・半藤末利子氏(随筆家、漱石山房記念館名誉館長)や文学研究家の関口安義氏等が執筆した八編の論考が載せられている。

松岡譲没後50年を契機として、長岡市立中央図書館の館報『図書館の窓から』第164号(令和元年四月)に「没後五十年 長岡が生んだ作家 松岡譲」と題した特集記事で、松岡譲の生涯や関連の図書が紹介された。また、『新潟日報』も「松岡譲没後50年を特集 長岡ペンクラブ誌『ペナック』(令和元年六月二十一日)と、「長岡出身の小説家・松岡譲没後50 長岡市民の思い」(令和元年七月十八日)の二つの記事を出した。

現時点で、研究者のほか、半藤末利子氏も積極的に松岡譲に関わる資料の収集、整理を取り込んでいる。平成三十年(二〇一八)九月二十二日から十一月二十五日まで、新宿区立漱石山房記念館は開館一周年を記念するため、「松岡・半藤家資料受贈記念特別展 漱石追慕のかたち―漱石、筆子、そして松岡譲」という特別展を開催した。さらに、特別展の開催中、同館で半藤氏は「孫から見た夏目家」と題する記念講演(平成三十年十月二十一日)を行った。

松岡の研究を長年行っていた関口安義氏は、松岡を「不遇なる作家」と評価している(『評伝 松岡譲』小沢書店、平成三年一月)。また、半藤氏は、「父は世間から抹殺された」と述べている。このような背景の中で、関口氏は上述した『Penac』最新号の特集で「研究にも時がある」と呼びかけている。

筆者は松岡譲資料を調査していると同時に、平成三十年七月二十日に、半藤末利子氏に対して「松岡譲の作家生涯」をテーマにインタビューを行った。場所は東京都世田谷区の半藤氏のご自宅である。以下は本インタビューの記録である(括弧内は筆者が補足したものである)。

一、父は世間から抹殺された作家

劉東波 松岡譲先生は、しばしば「夏目漱石の娘婿」や「芥川龍之介の親友」と言われます。関口安義先生の松岡譲研究も芥川龍之介経由で行われたそうです。半藤さんは、譲先生のことをどのように見てもらいたいとお考えでしょうか。

半藤末利子 私ですか。「十年の沈黙」というのを、小説家を志し

たのなら、言い出さないでほしかったと思います。彼が結婚後の七年間一緒に暮らしていた祖母漱石夫人が「漱石も四十歳過ぎてから書いてあれだけになったから、あなたも四十を過ぎてから書きなさい」と言い、環境的に不幸だから、すぐ気の毒だったと思うけれど、あの時からずっと書いてほしかったと思つていますよ。そんな空白（結婚後、七年ほど文壇から身を引いた期間を指す）なしに、空白を作るということは、いかにバカな決意をしたのかと思えますね。小説家になつたら、絶対その道に突き進めばよかつたと、そこは父の弱さだと思えます。結局、元に戻れるわけがないのだから、そんな十年の空白を作つたら、ダメです。どんな職業でもそうだと思いますよ。もつと若い時には、本当に、その第三次新思潮とか、第四次新思潮とか、あの時は、彼は毎月小説を雑誌に載せるほどの創作意欲があつた人なのです。十年やめていれば、ものは書けませんよ。まあ、その七年後に『法城を護る人々』を出したとは言いがた、ほとんど寡作になつてしまったのは、それは残念だと思ふ。母親が惚れちゃつたのもね、父の創作活動だけを考えれば、非常に迷惑だつたと思うわけよ、母親を。

劉 なるほど。やはりご家族として、特に娘さんとして讓先生を作家として認めてもらいたいという気持ちでしょうか。

半藤 そうだつたでしょうね。ですが、作家として認めるには、あんまりにも寡作だし、本当に書けなくなつていましたよ。しばらく書かないと書けないもんだねつと言つたこともあるし、だからそういう断筆宣言なんていうバカなことしなければよかつたと、今でも思つています。

劉 やはり讓先生の作家生涯に、その結婚は大きな影響を与えたと理解してもいいでしょうか。

半藤 夏目漱石の娘なんかもらわなかつたら、あの人は自由に書けたと思いますよ。

劉 そうですね、讓先生はもつと作品を書けたらよかつたと思ひますね。

半藤 思いますよ。書かなければいけないと思うよ、作家志望でなければいいですよ。でも、自分で小説家になりたいと決意して、新思潮の同人になつたことは、小説家になろうと思つたから、そこへ入つたわけでしょう。だつて、皆と友達になつたでしょう、でも久米さん（久米正雄）とは大親友だつたのですよ。お互いに全く正反對の性格だから、補い合うというか、そういう感じだつたのよ。それなのに、そういうふうにならなかつたから……

劉 讓先生の創作生涯で、結婚した後の約十年で創作をやめていた様子が窺えますが、それはなぜでしょうか。

半藤 それはね、うちの父と母は非常に世間から悪い男と悪い女と思われてきたわけですよ。

恋愛して結婚しなければよかつたけど、父は結婚してしまつたために、本当に抹殺されましたよ。でもね、十年間小説を書かないなんて、さつきも言つたけれども、私はそれがすごく間違ひだつたと思ひます。

自分が小説家になりたいという決心をしたら、誰が何と言おうが、書けばよかつた。十年書かなかつたら、書けなくなるんですよ。毎日書いていないと、文章つて書けないですよ。何でもいいから、くだらないものでも、本当なら、いい文章とか、そういうものではなくて大作など書こうと思わないで、とりあえず何か書いてないと、文章は書けなくなつてしまうから、父はそうやって、十年の沈黙を決心した

ことは、けしからんことだと思えますよ。それは父の誤りだったと思えます。それで十年たつて、もとのように書けるかというと、そうは行かないですよ。ほかの人はどんどんどんどん、くだらないものでも何でも書いて、書くことつて、一つは、夏目の家も祖母が書かないで、うちを守ってもらいたいから、小説なんて家のお父様は、漱石のこと、家のお父様は四十過ぎてからお書きになって、あれだけになったから、あなただつて、四十過ぎまで書かないでいいとか、そういうことを言つて、書くことを禁じたこともあったのです。

あれだけの才能があつて、そしてその目のつけるところのいい人が、十年も書かないで、まあ、七年目に書いたけど、『法城を護る人々』をね。でも、その七年間、夏目の家なんかに住まないで、小説で食べて行けたのだから、そこそこ贅沢しなければ、その間ずっと書いていたら、全く違う人生を歩いたと思えますよ。それがね、もつたいなくて、しょうがないのよ、腹が立つもの。

家族だから、そのために経済的にも苦労したでしょう。母に対して、苦労させたから、私はどうしてそんな気抱いたんだろうかというね、あれがありますよ、すごく。

劉 色々な誤解があつたようですね。

半藤 誤解だらけですよ。仕方ないわね。世間が、一斉に父と母を、久米さんの小説のおかげで、悪人と非難したからね。大変そういう意味で不幸な人だったと思えますよ、母と結婚して……。〔笑〕

二、漱石の娘と結婚しなかつたら、違う人生かも

劉 私は讓先生の単行本の刊行状況を調べました。やはり、今手に

入れられるものはほとんど漱石関係のものです。他の小説集、随筆集などは、古本屋でも手に入らない状況になっています。

半藤 ほとんど絶版になつたんですよ。これ〔敦煌物語〕昭和十八年版も

絶版になつて手に入らないですね。

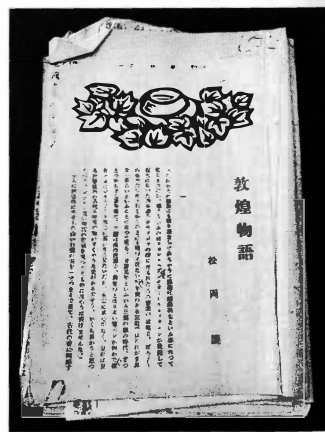
劉 はい、こちらのほうは二〇〇〇年代に新刊が出ましたが、今は古本屋からしか手に入らないです。しかも結構いい値段がします。それで、こちらは半藤さんが長岡市郷土史料館に寄託した本のリストですが、これらの本は全然手に入らない状況となっています。まあ、当時の刊行部数も少なかったし、戦争の影響もあつたでしょうが。

半藤 そう、そう、戦争もあつたしね。だから、本当になかなか難しいですね。だつて、どこかの出版社が出してくれなければ、仕方がないですよ。

劉 はい、もともと讓先生の作品が少なかったのは残念だと思えますが、書いたものがあまり読まれていない、あるいは研究されていないのもすごく残念なことだと思えます。ですので、松岡讓の研究はこれからだと思えます。

半藤 ありがたい、どうも。珍しい方ですよ。なかなか日本人でも、研究しないのに。

劉 いえいえ、そんなことはないですよ。ただ、親友の芥川が文豪として認められている一方、讓先生の作品はほとんど読まれておらず、



「敦煌物語」初出

知られていないのは残念ですね。

半藤 芥川はね、私の思うに、やっぱり非常に才能がありますし、それから、学者で、大変頭のいい人でもあるけれども、小説家として、漱石がちょっと最初に、その「鼻」、こういうものを書いてご覧なさいと言ったら、漱石が褒めたというので、有名になっただけの作家です。そう言ってしまうと悪いですけど、私はそう思っていますよ。それほど書いていないですよ、あの方は。まあ、日本で文豪になっているんですけど…… だから、そういう意味では、やはりあの方も結局は久米さんにどっちかというところ、皆が同情的に付いたから、松岡を抹殺した一人だと思えますよ。芥川もまた久米に同情してしまっただけでしようか。

劉 そうですか。やはり当時の文壇や出版社業界によく知られたのでしようか。

半藤 菊池寛は親分ですからね。菊池寛とはすごく仲が良かったわけ、父はね。皆あの中では、芥川さんと菊池寛と、久米正雄と、それから成瀬正一さんという方と、その四人は同人で、成瀬さんはフランス文学の先生になったから、小説はそれ以降書かないですけどね、九州大学の教授で。また、早く亡くなったから、余計に小説を書けなかつたですよ。学者として生きる道を選んだからね。だから小説家ではなかつたけれど、そうやってすごく若い時仲は良かった。『破船』の問題で、それからバラバラになって、どっちかというところ、判官鼻頂というか、負けたほうに皆行ってしまうわけですよ。しょうがないよね、それは。だから、私は本当に思うけど、うちの母が、父に惚れなければよかつたのと思うのよ、いつも。そうすれば、父は自由に書けたわけじゃないですか。

劉 ああ、そういう面で筆子さんが「惚れなければよかつた」と

おっしゃっているのですか。

半藤 そういう面ですよ。冗談じゃないのよ。十年の沈黙なので、やる人もバカだけど、なんであなたは、私の父親に惚れたのよと思うよ。そうして自由にさせてあげれば、あの人は別のところへ嫁に行つて、久米さんは大嫌いだから、行かないでしょうけど。なんか久米さんと結婚する必要もないし、嫌いな人と、でも誰かほかの人と小説家ではないような人と結婚して、あの人に惚れないでほしかったです。うちの父は、うちの母が惚れたと言つた時に、びっくりしちゃつたよ。ものすごくびっくりしたから。それは光栄なことでも、でも自分も思つてもみない人でしょう。相手は、先生の娘ですから……

劉 高嶺の花のような存在でしようか。

半藤 高嶺の花以上ですよ。そう思つていたわけだから、大迷惑したと思う。はつきり言いますとね。ただ、若いから、勝ち誇つたとか、そういう気持ちじゃなくて、本当に困惑したと思いますよ。だって、自分を愛してくれたことに対して、嬉しかったと思うけども、それが得意になつているとしか友達に目に映らなかつたですね。友達たちはそう解釈しましたね、しょうがないですね、それは。若いし、若いから父もそういう気持ちはあつたでしようよ。だけど、本当言うと大迷惑したのよ、あの人の。

私は、どっちかというところ、主人のほうが私に惚れているわけ。だからそんなに大変な生活も送つてこなかつたし、サラリーマンだったから、給料はあつたし。母みたいに大変な生活も送らないし、ちやほやされてきたから、私は母に言つたのよ、「結婚なんか、相手に惚れられて、そのまま結婚してしまえばね、自分はそれほど気が狂いそうに惚れなくても、結構幸せに生きられるものよね」。そう言つたら、母

親が「私は嫌だわ。」そう言つてね、母は私を睨みつけて凄く怒つたんですよ。「私は嫌、自分が好きじゃなければ結婚なんかしないわ」つて言つたのよ。その言葉の強さが、ガンと響いて。母は外観が大人しそうで、優しそうな人ですが、その言葉の強さと言つたら、なかつたから。ああ、そういうもんかつて思いました。「私はあなたのようなこと考えない」と言つて、すつごく怒つたんだから。それで、それを書かなければと思つても、なかなか書けないですよ。また悪口になつてしまうから……(笑)

劉 私達にしてみれば、このような誰にも知られていないところが面白いですよ。小説家の小川洋子さんがおつしゃつたように……

半藤 私は松岡譲と筆子の娘だから、そういう先入観で人から見られるわけです。久米正雄は先にそういう小説を何回も、何回も書いて、皆にそう思わせたから、実際はそうではないと、いくら弁解したところで、どうしようもない。それから父は本当に筆を折つたから、それに対して一々反論を書いていかなかったから、だめですよ。それと同じように、家族というのはどれくらい傷つくかということを思うと、あれはずいぶん家族を傷つけましたね。だからすつごく嫌ですよ。

三、父の故郷・長岡に松岡譲資料を寄託

劉 最近、新潟に行かれたことがありますか。

半藤 いいえ。父の生家のお寺に行かれたことはありませんか。

劉 まだです。本覚寺ですね。

半藤 そう、本覚寺です。本覚寺の住職が亡くなったのですよ。私のいとこの息子にあたる人で、それは、実子がいなかったから養子に

したんですけど、その住職が、亡くなったんですよ。私にはとても大切な人でしたが、真冬でしたから、とつても行けなかったのよね、雪で。それから、向こうも、無理して、いらつしやらないでくださいって言われたから、ああ、そうだなあと思つて、いいですかと言つて、あとで暖かくなつたらいきますねと言つたけど、何か今は、春もなければ、秋もないというか、それで、少し暖かくなつたら、すぐ夏でこの暑さ、だからなかなか行けないのよ。両方の都合のいい時じゃないと、向こうは向こうで都合は悪く。それなのに、急に亡くなつたんですよ。急に亡くなつたから、どうしてみようもないでしょう。私のいとこの奥さんは、私より年上でまだ生きていますよ。

劉 そうですね、いずれは本覚寺にお伺いしたいです。

半藤 ぜひ行つてください、今度紹介しますから。

劉 分かりました、ありがとうございます。
末利子さんは長い間長岡でお過ごしになられましたよね、どのくらいでしたか。

半藤 結構長くいましたよ。案外長くいました。小学校三年からずっと高校まで、高校卒業してもいた。両親がだんだん年をとってきたから、だんだん離れられないというか、お互いに、それでつい長くいました。

あのひとは寡作だから、そうやって、もつと作品がいっぱい残つていたら、本当にね、一つ一つ書くものは、問題作だと思うし、西域もの、あの時代でしょう。あんな時代にこんなもの書ける人はいないのだから、大したもんなんだけど、でもあんまりにも寡作すぎて、ちよつとやっぱり残念ですね。

劉 譲先生の創作の様子、あるいは面白いエピソードを紹介して頂

けますか。

半藤 エピソードはないけれど、本当にお金がなくて、貧乏していたの。だって、仕事しないから、本当にそういう父が嫌いだったから（笑）。母ばかり可哀そうと思ったけど、『白鸚鵡』という本があるのよ、長岡の史料館に置いてあると思いますよ。それは大衆文学賞をとったのよ。だから、そういうものも長岡でも書いたわけだから。書いたものはそうやって、人が認めて賞をくれるから、ちゃんと書けばいいのよね。父親としては失格だと思います。どんなことをしても、子供たちのため、お金をちゃんと稼がなければいけない、最低の線は。学校の先生にしても、何にしても、できるじゃない。何もせずに小説家だと思っていたから、何でも許されるということはありません。やっぱり、家族を養う義務があるのだから。それを何でもできる人がそれをやらなかつたというのは、ある意味で怠惰じゃないかなあ。私にとつて、そういう意味で父を認めていないというか、ある程度ありますよ。

劉 長岡市郷土史料館に、讓先生の文学作品以外に、油絵なども多く並んでいます。絵画もお得意ですか。

半藤 小説が書けなかつたら、その分を：

最初の頃、長岡で戦争が終つて、雑誌などができはじめたころ、東京から新聞社とか、それから雑誌社とかしょっちゅう原稿を頼みに来たのに、それを書かなかつたのよ。「何で」と思ったわ。私、頼みに来たら引き受けて、本当は父が引き受けてくれるんだろうなあと思つて、母親と中で一緒に待っていると、断つてしまうのよ。山本五十六を書けといつても、やっぱり父にとつて書けないものだったのかもしれないけど、家族のためにそういう要請があつちから、こつちからあれば、どんなものでもいいから書いて、下手くそであろうが何であらうが、家族を養うために、あれだけの注文が来ているのは私が見ていたから、雑誌記者とか新聞記者とかはよく来ていましたよ。だから、父に注文をしに来るのよ。まだ作家と認めていたから。そのうちに誰も認めなくなつたから、来なくなつてしまった。（笑）

劉 この度、半藤さん、及び長岡市郷土史料館のご協力を頂いて、讓先生関係の寄託資料を拜見致しました。これは一般市民にとつても、研究者にとつても非常にありがたいことです。寄託までの経緯を紹介して頂けないでしょうか。

半藤 館長さんが家へいらつしやつたんですよ、寄贈でも構わないけど、とりあえず、寄託して頂けないかと言つてきたので、寄託しました。

何代目の館長さんか、すごくいい方でしたよ。それでやつたんですよ。家へ、長岡から引き上げて、私達が東京にいる頃で、まだ母がいたんじゃないかな。それで、そういうものを、とりあえずこれくらいを持つて行かれますかと言つて、それで本もね、持つていかれたら、返してこないから、本だけは家に置いときたいから、じゃあ作つてあげるつて（寄託した本の複製品のこと）、作つてくれなかつたけど、簡単に作れるもんならね、作つて欲しかつたけど、『白鸚鵡』とか、私の家にはないもん。

劉 なるほど。寄託資料の中で、讓先生の文学創作に関する原稿は、大きく言つて三種類があります。『敦煌物語』関係一種類、漱石関係二種類です。しかし、それ以外に、讓先生は膨大な小説、随筆、評論等を書いていらつしやいますが、他に何か原稿や創作ノートはありますか。また、これらの寄託資料の活用に関して、どのように思つていらつしやいますか。

半藤 あると思いますけど。もしあったらね、そっちにお返ししますね。資料の活用に関して、全く考えていませんね。でもやはり一箇所にとまらなければなりませんよ、分散してしまうとちよつとね：劉 ありがとうございます。それから、譲先生と芥川龍之介の書簡は、当時誰かに売ったのではないのでしょうか。

半藤 そうそう、でも私がい戻してね、漱石館にあげたわよ、今回。お金はかかったけど、それはちゃんとやらなければならぬと思つたから、買い戻した。その家はお金がほしいから、自分のほうで古本屋に鑑定してもらつて、お金はこれでいいですかつと。書簡、それからハガキがいっぱいあつて、それで四百万円で買ったの。四百万つて大きいお金だったけど、でもね、他にまた分散しちゃうと嫌だから、まとめて買ったんですよ。松岡譲記念館でもできれば、けどなかなかそこまでは、私が生きている間にできないと思つたから、とにかく公にして置くには、漱石記念館で。私は今名誉館長しているから。いつでもね、松岡譲記念館は、できないと思うから、できるのであれば、そっちへ返してくださいといくらでも言えるけど、芥川のほうに取られないように。

劉 ご著書の『漱石の長襦袢』の「あとがき」に「いつか父松岡譲を書かねばならぬ」と書いていらつしゃいますが、よろしければその本の進展について紹介して頂けないでしょうか。

半藤 この年になると、大変ですね、なかなか：

劉 ご自身のエッセイ集はもう何冊も出されていますが、まだ毎日書いていらつしゃいますか。

半藤 毎日というわけじゃないけど、書いています。

「私が好きじゃなきゃ結婚しないわ」という、母のそういうことばは、

私にとつて強烈だったから、そういうところから出発していいかなとか、あるいは、父のファンですかね、これで私の本の解説を書いてくれた人がいた。文藝春秋の私の担当者が来るとき、何枚か書いてくれないかと言つたんですよ。それで、その人は、このまま父のことを伸ばして、本が一冊できるでしょう、と私に言つたのよ。それを読んで面白いと言つていたから、そのままなんとかして、本にしましょうと言つてくれたけど、彼は病気になつて、編集部から離れてしまった。その人がもつと積極的に「こうしろ」「ああしろ」と言つてくれたら、できたかもしれない。だから、それでやつてもいいなあと思つている。なんとかして、前後を書くとか、あるいはこの続きを書いて行くとか、一冊にまとめることは、ある程度できるかもしれない。

* 本インタビューの記録原稿は、半藤末利子氏にご確認を頂きました。さらに、半藤氏はインタビューの日のことを「ありがたい珍客」(『味覚春秋』第九号、平成三十年九月)というエッセイに綴っている。また、本インタビューは日本学術振興会のご支援や長岡市郷土史料館のご協力を頂いたものである。皆様に心より御礼を申し上げます。

〈筆者・日本学術振興会特別研究員、新潟大学博士研究員

〒九五〇―二二八一 新潟市西区五十嵐二一八〇五〇 新潟大学院現

代社会文化研究科〉